

阿寒高校の「地域キャンパス校」化を考える

私は、3つの心配をしています!!

1、派遣で十分な授業効果が得られるか？

選択肢を増やすということですが、派遣される教員は原則、授業時間以外はキャンパス校にはいません。授業だけでしか会わない教師と生徒の関係で、十分な学習が保障されるのでしょうか。(道内には、足しげくキャンパス校に通い、生徒と交流し授業の外に補修もしてくれる先生もいるそうです)



2、インターネットをつかった遠隔授業は？

双方向というのがうたい文句です……。確かに、1 2度なら、パソコンを使ってということで、子供達に興味を持たせることはできそうですが、そんなに単純ではありません。双方向と言っても、操作できるのは片側だけですから、簡単に言えば、昔のトランシーバーみたいなもので、とてもスムーズとは言いがたい感じです。

しかも、遠隔授業で子供達の興味をつなぎとめておくためには、これまでとはかなり違った授業準備をしないと、うまく行かないような気がします。これまでの授業準備とは全く別の準備をしないとと思います。準備する教員にそれだけの余裕はあるのでしょうか。

3、地域キャンパス校で本当に学校を守れるか？

地域キャンパス校に転換をしても、生徒を確保できなければ廃校につながってしまうます。道教委は、阿寒高校は地元からの進学率も高く、存続させたいと言っています。確かに、閉校を前提としたものではありません。しかし、学年1クラスです。これ以上の間口減はイコール募集停止・廃校です。少なくとも、定員の半分以上は生徒が毎年入学してこない、と、存続できなくなってしまいます。

さらに道教委は2015年度以降、釧路管内で3-4間口の学級減を考えています。これも心配の種です。



村上かずしげ 通信

201年
7月3日

発行 日本共産党釧路市議団 23-5212

実際のパターン例

すでに道内15校が
地域キャンパス校になっています

英語、数学などの教員を派遣してもらい、自校の英数などの先生と一緒にチームティーチング(補助の教員がもうひとりついて、2名で授業を指導する)や習熟度別、進路別、あるいは少人数などの指導をしてもらう。
家庭科や音楽などの教員の派遣を受け、家庭科や音楽については定員内での教員の配置はしない。(そうすると、結果的に数学、英語などで複数の教員を定員内で配置できることになる)
理科や社会などの教員の派遣を受け、例えば自校の先生で歴史と物理、派遣の先生で政治経済と生物の授業を行なうなど、選択の幅を広げる。

阿寒高校がH25年度から、1学年1クラスの「地域キャンパス校」となることが決まっています。地域キャンパス校というのは、センター校(釧路湖陵高校を想定しています)から週8時間程度、教員の派遣を受けつつ、授業等を行うもので、出張授業ができないときには、インターネットを活用して、遠隔授業が行われます。

さて、現在2間口で、教員は15名程度です。これが1間口になると9人になります。これでは国数英理社の主要5科目に体育、家庭科、音楽などと考えれば、一科目につき先生一人となってしまいます。でも、理科といっても、生物、地学、物理、化学とあるわけで、一人の教員が教えられるわけはありません。そこでセンター校から教員の派遣を受けるわけです。

湖陵高校から阿寒高校が、実際にどんな教員の派遣を受けるかは、両校の協議(連携委員会)で決められることになります。



この通信は政務調査費で作成しました。